

長岡あーかいぶす 第8号

編集・発行／長岡市立中央図書館文書資料室

<http://www.lib.city.nagaoka.niigata.jp/monjo/index.htm>

文書の虫

～長岡藩領上組割元・金子家文書～

長岡藩領上組割元をつとめた村松村の金子家に伝わる文書は、長岡市史編さんの際に重要視された資料群です。

文書資料室では、今年の春、中越大震災で被災した土蔵に保管されている金子家文書の調査を行いました。幸い長岡市史編さんの際にダンボール箱などに納めていたため被害はほとんどありませんでしたが、土蔵の被害は大きく、今後の保存に不安があるため、文書資料室へ寄託されることになりました。

金子家文書は「御用留」の伝存状況が充実していることで知られます。「御用留」は、藩から村へ通達された触書や廻状、村が藩へ訴え出た願書、近隣の村役人たちと交換した文書などを控えとして書き留めたものです。寛政5年(1793)の

ものが最も古く、欠けている年もありますが、明治4年(1871)までが残されています(明治3・4年は民政局のもの)。本来ならば長岡藩の通達の原本が藩庁文書として残っているはずですが、戊辰戦争と長岡空襲の戦禍のなかで失われてしまいました。村に残された「御用留」は、江戸時代の長岡を知る重要な歴史資料なのです。

土蔵の2階から資料を運搬する際、かつて文書が保管されていた長持(長方形で大型の木箱)に貼られていた一枚の紙に目が留まりました。「昭和五年十月二十二日改メ 永久保存セヨ」。昭和初期に江戸時代の文書を整理した所蔵者の先祖が、永久保存の必要を子孫に訴えたものです。

今回の寄託により、未整理の漢籍・国書や書簡類なども含めた金子家文書の全体内容をあきらかにする作業が始まります。公開はもう少し先になりますが、将来、古文書解説講座のテキストや長岡市史双書への掲載などを検討中で

す。金子家文書が大勢の人たちから活用してもらえるように、文書資料室では整理作業を進めています。



(小林良子)



▲金子家に伝わる長岡藩の通達などを書き写した「御用留書帳」

左:「長者原畑新田願一件有之候」「宗旨請証文文言有之」と記された文化3年(1806)「御用留書帳」表紙。

右:村松村の重左衛門(割元格)と孫七(百姓)は里漆の手入れが良く、毎年の房蠟(里漆の実)の納高も多い、精を出して働いているので「誉」を与えるべきであるという、寛政11年(1799)6月28日付の長岡藩の文書を書き写したもの。

中越大震災から5年

文書資料室は、災害に負けず、市民協働の取り組みで、
長岡市の文化遺産を後世に伝えていくことを一生懸命考えます。

5年前と5年間

長岡市内を震度6弱の揺れが襲ったのは、平成16年10月23日（土）のこと。復旧のための休館を経て、文書資料室は11月3日に業務を再開しました。この日から、長岡市史編さん室を引き継ぎ、郷土のアーカイブ（記録保管庫）として歩んできた業務を発展させ、災害と正面から向かい合う取り組みが始まったのです。

あれから5年。文書資料室では「被災した歴史的資料の救済」と「震災記録の収集」を二本柱に、大勢の皆様を支えられながら、活動を展開してきました。地域へ出向いて資料所蔵者と対話する歴史資料所在確認調査、市民と手を携えて歴史資料を整理する長岡市資料整理ボランティア、学校を訪問して収集する災害アーカイブス。「現場」で考える姿勢を大切に、「史料保存」という命題に取り組んでいます。

史料保存の現場から

10月20日（火）に開講する歴史講座「中越大震災～史料保存の現場から」（全5回）は、5年間の活動を文書資料室のスタッフが自らの言葉で語ることが講座のコンセプトです。

長岡市史双書No.48をまとめるなかで提示した課題をどのように解決していくのか。「現場」で考え、試行錯誤しながら取り組んでいる活動の現在形を市民の皆様にご報告します。



▲「文殊の知恵」を大切に

剥離した襖下張り文書の解読にチャレンジする長岡市資料整理ボランティア古文書チームの皆さん

新たな試み～展示コーナーと郷土史交流室～


中越大震災から5年の節目を迎え、文書資料室では互尊文庫の館内施設を活用した新しい試みを始めています。



▲互尊文庫1階の展示コーナー

まず、互尊文庫1階の展示コーナーに、所蔵資料や活動を紹介するテーマ展示を始めました。現在は、昭和39年に開催された新潟国体関係の資料（成願寺温泉養壽館文書）を展示中です。おおよそ20日ごとに展示換えを行います。まちなかへお越しの際は是非ご覧ください。

そして、これまで講座などで使用していた3階会議室を「郷土史交流室」として11月1日からリニューアルします。フロアのスペースを「資料整理の場」と「交流の場」の2つに分け、文書資料室の業務を行うスペースと市民が活動するスペースを共用する、いわばリビングダイニングキッチンのような空間です。文書資料を通して市民と行政が協働する場に育てていければと考えています。「交流の場」は、所蔵資料を活用した事業や地域史などの調査・研究活動を行うグループに貸し出しをします。詳しくはホームページ、もしくは直接お問い合わせください。

新しい試みに挑戦しながら、所蔵資料の整理・保存・活用、郷土の歴史に関するレファレンスなど、長岡市の文書館構想をふまえた着実な業務を積み重ねていくことがこれからの課題です。 （田中洋史）

中越大震災5周年と復興を祈念して開催する講座・展示会の詳細は、各図書館、ながおか市民センター等に設置してあるチラシをご覧ください。

災害の記録と記憶(2) 記録としての新聞

災害の記憶を風化させないために文書資料室が収集・保存に取り組んでいる「災害アーカイブス」。今回は新聞資料をご紹介します。

文書資料室では、平成16年の「7・13水害」「中越大震災」、平成19年の「中越沖地震」の発生にともない、平成16年7月以降の新聞を保存しています。震災発生翌日の10月24日(日)の新聞朝刊を見ると、各紙とも中越地方で震度6強の揺れを観測する地震が3回あったこと、上越新幹線が脱線事故を起こしたことを伝えている点は共通しています。その一方で、けが人や死者・行方不明者の人数については、新聞ごとに違いがみられます。

また、全国紙の一面の写真には上越市など、中越地方以外の写真が使用されています。この時点では、震度7の揺れを観測した川口町や、のちに全住民が避難を行うことになる山古志村(当時)の被害には各紙とも触れていません(10月24日の「新潟日報」号外には、山古志村の被害に触れた記事があります)。震災発生翌日の新聞は、被害の情報が錯綜し、混乱していた当時の様子をよく伝えています。地震の発生が夕方だったこともあり、朝刊の原稿締め切りが迫るなかで、各新聞社が紙面作りに取り組んでいたことがうかがえます。

10月25日以降の新聞は、被害状況に加えて、ガス・電気・水道の復旧状況、避難所や学校の休校など、生活関連の情報が重点が置かれるようになります。これ以降、各企業から被災者へのお見舞いの言葉とともに、被害を受けた自社製品の修理や相談に応じることを記した新聞広告が増えていきます。



▲文書資料室の書庫に整理・収納された新聞

全国紙・地元紙を「災害アーカイブス」の資料として保存。閲覧しやすいように、1か月分を2冊に分けて製本してあります。災害発生翌日の新聞の比較や、復旧・復興のあゆみなどを記事・写真からたどることができます(閲覧可)。

このように被災地が復興に向けて動き出すなかで、新聞が提供する情報も刻々と変化していったことがわかります。災害時でも毎日発行された新聞は、被災地の人々にとって、現在置かれている状況を伝えてくれる貴重な情報源でした。

日々の動きを時系列で追うことができる新聞は、震災直後の状況や復旧・復興の軌跡を将来の人たちのために伝えてくれる大切な記録といえます。



(野村和正)

【参考文献】

- ・『新潟日報の168時間 中越地震と新聞発行の記録』(新潟日報社、2005年)

●長岡市史双書 最新刊!

No.48 『新潟県中越大震災と史料保存(1)』

長岡市立中央図書館文書資料室の試み』

中越大震災をきっかけに文書資料室の中核業務となった「歴史的資料の救済」と「災害アーカイブス」。市民協働で取り組んだ「長岡市・文書資料室型」の4年間の活動を担当者の報告と、豊富な資料・写真から振り返ります。被災資料の概要や関係文献目録も収録。(田中祐子)



- ・「資料整理ボランティア通信」「庁内長岡あーかいぶす」などの活動広報資料、県内の活動動向に関する文献目録などを収録。
- ・頒布価格1,500円。
- ・B5判223ページ。
- ・文書資料室、市内各書店で販売しています。

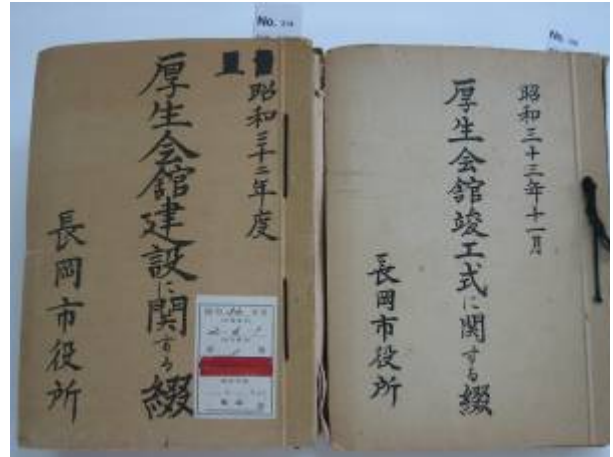
歴史公文書は語る(3)

厚生会館の思い出

昭和33年11月の竣工から50年間、大勢の市民に利用され、親しまれてきた厚生会館。コンサートにピアノの発表会、プロレス観戦など、誰もが一つは厚生会館の思い出を持っているのではないのでしょうか。今回はスポーツ振興課より移管された歴史公文書の中から、懐かしい厚生会館の姿を紹介します。

「長岡市に厚生年金の還元融資による厚生会館（保健体育館）の建設についてのお願い」（以下抜粋・要約）によれば、長岡市に厚生会館が建設されたのは、次の四つの理由からでした。①積雪量が多く冬期間は屋外での活動が制限され、雪国特有の疾病が後をたたない。②勤労青少年の体位が同年齢の学徒よりも劣るのは、伸びるはずの能力が訓練される機会がないからである。③県の中央であるとともに交通の要衝であること。④県下唯一の戦災地であり、戦後は被災小学校の復興と新制中学校の建築に迫られ、市民の体育施設までは手が出せなかった。

さらに、当時の内山市長は「…独り当市のみ利益でなく広く県民全体の直接間接に及ぼす恩恵は計り知れないものがあると信じます。…」と述べています。厚生会館の建設については政治的な事情もありましたが、以来50年もの長きにわたり、長岡市民のみならず、県民の文化・スポーツ活動の拠点として、大きな役割を果たしてきたといえるのではないのでしょうか。



▲厚生会館の建設・竣工式に関する綴

「長岡厚生会館の実情」の別紙5「主なる行事（大ホールのみ）」には、竣工後一年間の行事名と入場者数が記載されています。「春日八郎ショウ 2万2千人」、「三波春夫ショウ 1万6千人」、「SKD（松竹歌劇団） 2万6千人」、「力道山プロレス 5千5百人」などの他、市内企業の家族慰安会も多く行われ、合計で63万9千人余もの人が来場していることがわかります。行事名の一覧を見ていると、当時の流行や世相を彷彿とさせる催しものが幾つもあり、厚生会館を中心に、市内外から訪れた大勢の人で賑わう大手通りの様子が目に浮かぶようです。

平成21年2月、厚生会館解体工事が始まり、平成23年には「シティホール」（仮称）として生まれかわり、市民とともに、また新たな歴史を刻んでいくことになります。



（桜井奈穂子）

●平成21年度の歴史公文書の整理



▲整理した歴史公文書を収納した書棚（和島支所）

合併した市町村の保存期間を満了した公文書から歴史公文書を選別・保存する作業も最終年度に入りました。本年度は和島・小国・中之島地域の公文書の整理を実施します。

整理作業は、歴史公文書に付箋を貼り、通番を付け、目録を作成するものです。整理が終わった簿冊等はダンボール箱に入れ、書架に納め保存されます。

歴史公文書は、このような作業を経て、合併した市町村の歴史を語り継いでいくのです。



（稲垣美知子）

大平与文次は天保10年（1839）に三島郡浦村の庄屋大平家の長男として生まれ、慶応2年（1866）に父の後を継いで庄屋になった。

明治10年（1878）には「新潟新聞」の記者を勤めたり、案内図「長岡みやげ」（明治11年）を出版したりしている。明治11年の明治天皇巡幸の際には、長岡警察署の探索掛として、種苧原の坂牧善作に諸調査への協力を要請するなど、連絡や情報収集で各地を巡った。絵師の片山翠谷も長岡警察署の依頼を受け、行在所となった表町校などの絵図を作成しているが、彼の日記には、大平という人物の訪問が記されている。また、巡幸の際、大橋佐平宅に東京日々新聞の記者らが宿泊した。与文次は、明治14年にこの大橋佐平とともに「越佐毎日新聞」を発行しているが、巡幸を契機に活動の幅を広げていったと思われる。

「越佐毎日新聞」を発行した与文次であるが、翌15年2月には退社し、5月に私財を投じて、新たに「長岡日報」を発行した。全国的に新聞や雑誌が相次いで発行された時期で、新潟県内でも言論活動が盛んになりつつあった。「長岡日報」は挿絵を入れるなど「越佐毎日新聞」とは異なる紙面を目指したが、すぐに休刊となった。松方デフレと呼ばれる経済不況などが原因であった。このころ生家に財産上の負担を負わせることはできないとして、家督を長男覚太郎に譲って家を出、住まいも長岡町に定めたという。

与文次は新聞発行を続ける一方で、地域に伝わる古くからの歴史伝承・民話・風俗を集め、考究するために「温古談話会」を設立した。そして明

治23年に9年間の活動で集めた資料をもとに、『温古の栞』第一編を刊行した（月刊誌。発行人は息子の大平覚太郎で、与文次は主任記者。以後3年間に36編を刊行）。

『温古の栞』は出典が記されておらず、虚実があり（今年話題の直江兼続が蔦都で生まれたという記述もある）、引用には注意が必要である。しかし、「多少の批判はあるものの、大きく裨益している」（「発刊のこぼ」『長岡郷土史』創刊号）、「先見性を内に秘めて、歴史や伝承や民俗の断片を庶民の眼で黙々と拾っていったその編集態度は、中越地方史の解明を志す我々にとって何よりの模範」（井上慶隆「紙屋荘についての私記」『長岡郷土史』第7号）と、地域史の研究者からは、高く評価されてきた。

与文次は『温古の栞』終刊後、『越の寄せふみ』、『越後風俗志』を刊行したが、『蔵王大権現及王神史』を著した星山貢は、「氏が三誌に依って一世を鼓舞し、三条や佐渡に追従者さへ出した。業績は大きい。予が蔵王大権現を著す時、（中略）深淺真偽は別として一応は触れないものない事に今更感心した」（「明治二十年代の郷土雑誌」『高志路』第4巻第4号）と記している。



与文次の原稿などは残っていないという。実に残念である。

（金垣孝二）

【参考文献】

・『越路町史』通史編下巻（平成13年）

※お詫びと訂正

今年3月刊行の『郷土長岡を創った人びと』で、大平与文次の読み方を「おおひら よぶんじ」としましたが、正しくは「おおだいら よぶんじ」です。お詫びし訂正いたします。（文書資料室）

●好評発売中！『郷土長岡を創った人びと』

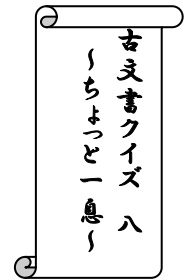
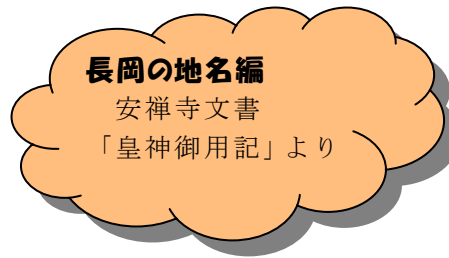
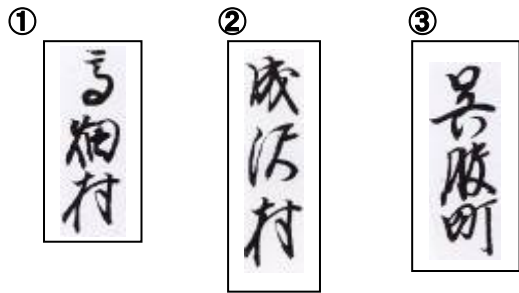


新長岡市の先人67人の業績をわかりやすく紹介する、郷土に対する誇りや親しみ、そして一体感を感じさせる一冊です。本書の発行は、市制100周年事業の一つで、新長岡市各地域に貢献した人物を市民から募集し、知識経験者や公募した委員が選定・執筆しました。

頒布価格1,000円、A4判、140ページ。お求めは市内各書店及び文書資料室、各地域図書館でどうぞ。



（田中祐子）



古文書の読みと住所・氏名・電話番号を、葉書・FAX・メールで文書資料室へお送り下さい。平成22年2月1日必着です。全問正解者の中から抽選で5名の方に粗品を差し上げます。
【前回の答え】①下柳 ②四郎丸 ③草生津

《新たに公開した所蔵資料一覧》

※寄贈・寄託順。保管場所の都合で当日閲覧できない資料もあります。

- ・ 柏崎市水上小林家資料（近代・現代、175点、子ども向け月刊誌等の雑誌、小林力氏寄贈）
- ・ 刈羽郡中里村桐沢青柳家文書（近世～現代、2,497点、青柳拓氏寄贈）
- ・ 古志郡栖吉村平沢家文書（近世～現代、290点、平沢明氏寄贈）
- ・ 古志郡栖吉村前田家文書（近世～現代、308点、旧栖吉村行政資料・俳諧関係資料等、前田惣一郎氏寄贈）
- ・ 関東町大倉自転車店チラシ（現代、1点、横山浩一氏寄贈）
- ・ 御巡見御案内手控帳（天保9年、1点、小杉清吉氏寄贈）
- ・ 神田三丁目大関家文書（近代・現代、耕地整理組合関係文書・酒・米穀類売掛帳等、158点、大関茂氏寄贈）
- ・ 南蒲原郡横山村坂口家文書（近代、55点、法事・婚礼・病氣見舞い控帳、坂口正吾氏寄贈）
- ・ 学校町細貝家資料（近代、79点、神楽舞関係資料、細貝信雄氏寄贈）

●史料保存こぼればなし（1） ホチキスとクリップの山



書類の整理に便利なホチキスとクリップですが、歴史公文書にとって、時間の経過による鉄さびの発生は大敵です。保存ための処理作業の工程として、さびた金属を一つ一つはずし、代わりに紙ひもでつづりなおしています。

最近、アルミ製のものも発売されています。未来の公文書整理では「山」になることはないかもしれませんが、歴史公文書を永久保存するための大切な一手間です。（稲垣美知子）

《編集後記》▽4月の人事異動で、古川絵理主事（越路支所地域振興課へ）と薙澤梓囑託員（長岡市職員に採用）が転出・退職。田中洋史主事（歴史的な文書（郷土史）専門職員）、野村和正囑託員、田中祐子臨時職員がスタッフに加わりました。▽難しいレファレンス（調査相談）ほど自分の勉強になります。文書資料室の所蔵資料を様々にひも解きながら、回答を作成する毎日です。（田中洋史）
▽今年の中越大地震から5年の節目を迎えます。災害を物語る資料は、何を私たちに伝えてくれるのか。それらの資料をどのように残し、後世へ保存していくべきか。文書資料室では、これらをテーマにした各種の講座・展示会を開催します。是非ご参加ください。（野村和正）

平成21年10月10日発行

編集・発行：長岡市立中央図書館文書資料室

スタッフ：金垣孝二、田中洋史、稲垣美知子

小林良子、桜井奈穂子、田中祐子、野村和正

〒940-0065 新潟県長岡市坂之上町3-1-20

（長岡市立互尊文庫2階）

TEL0258-36-7832、Fax0258-37-3754

E-mail：monjo@nct9.ne.jp